

特選

2010

金融広報中央委員会
会長賞

第43回「おかねの作文」コンクール

夢を実現するために

徳島県・徳島市立南部中学校 2年 林 正基

「理系の大学に進学し機械関係の仕事に就きたいです。」

これは僕が小学校の卒業文集に書いた将来の夢である。今も機械関係の仕事に就きたいという夢は変わっていない。しかし理系の大学に進学することは僕の希望通りにはいかないかもしれない。

去年の夏休み、何の前触れもなくその日は突然やってきた。父の会社が倒産したのである。父の会社は祖父が創業し、その後父の兄が社長を務めていた。その社長夫婦が失踪したのである。

その日を境に僕達家族の生活は激変した。両親は会社の後処理のため昼夜奔走し、夏休みだった僕は両親の苦悩の日々を間近で見ることになった。母は自分の仕事を休み父を支え助けた。父の会社とは別の会社に勤めている母までがなぜ?と思ったが、会社の役員が社長夫婦と父であること、全ての対応を父がやらなくてはならなくなったことを知り、僕は愕然とした。父の置かれた立場や責任の重さは中1の僕にも理解できた。「大変なことになった。これからどうなるのだろう」と考えると、落ち着かず、不安と心配で心がつぶれそうだった。

会社の経営状態や会計内容などを一切知らされていなかった父は、社長夫婦失踪後、初めて決算書を見ることになる。それは父の想像をはるかに越えた負債額だった。会社にはお金が全く残されておらず、結局弁護士さんや税理士さんの助言を受け、父は会社存続や再建を断念した。事実上の倒産である。その後会社は破産手続きに入った。こうして、会社はあっけなく終わりをむかえることになった。祖父が苦労して創業した会社を「終わりにしよう」と決断したこの時の父の気持ちを思うと、やるせなく切なかった。

夏休みが終わりに近づいた頃、母は我が家の家計簿と預貯金の通帳、保険証券を広げ、僕に言った。

「中1の正基には難しいかもしれないけど、今の我が家の状態を知ってほしい

から話しておく。」

と……。それらは几帳面^{きちょうめん}で堅実な母の暮らしぶりがよく分かる内容で、結婚してからの両親の軌跡をみたようだった。また、姉と兄を県外の大学に進学させ無事卒業させるために、両親があらゆる節約をしてきたこともよく分かった。この時僕は、生活していくために、毎月これ程のお金がかかっているのかと正直驚いた。人が生きていくためにお金が必要不可欠であると実感した。両親は共働きだが、家計簿を見る限り、到底母の収入だけでは暮らせない。父が職を失った今、生きていくことの根底にあるべき収入が絶たれたことになる。それは、当たり前にあった今までの生活が変わることを意味していた。僕は思った。これまで父は様々なことに耐え、家族のために長年働き続け、僕はそんな父に100%依存して暮らしてきたと……。

この時僕は、初めて自分の将来について真剣に考えたように思う。当たり前のように大学に進学することを決めていたが違う進路があるのではないか、大学へ行かなくても機械関係の仕事に就くことはできるのではないかと……。そして調べるうち僕は一つの選択肢があることを知った。高等専門学校に進むことだ。高校と違い5年間学ぶこと。卒業時に短期大学卒業と同等になること。また、卒業後大学3年生として編入も可能であること。高校を卒業し大学へ進学するよりも高専から編入したほうが随分学費が安いこと。高専は自宅から汽車通学できる距離だし、僕は「これだ」と思った。両親に話すと驚いたようだったが、父は、「正基の気持ちは嬉しいけど、進路はこれから時間をかけて慎重に考えよう。父さんも頑張るから。」

と言ってくれた。

幸いにもその後父はすぐに再就職をした。百年に一度の不況といわれる今、父がエンジニアとして必要とされる人だったと思うと、長くまじめに働いてきた父をより尊敬した。何より母の安心した様子を見るのが嬉しかった。その後も両親はお金によって生き方や考え方を変えることはなかった。以前にも増して互いを思いやり乗り切る努力を続けたのである。この出来事の後、家族の絆^{きずな}はより深く強くなったと思う。両親が僕に何一つ隠さず本当のことをありのままに話してくれ、僕を大人として扱ってくれたことも嬉しかった。

あの夏からちょうど1年が過ぎた。会社の後処理はまだ継続中であるが、

僕達は今も変わらずひたむきに前向きに暮らしている。僕は以前と変わらず何不自由なく毎日を送っている。しかし、母が懸命に家計をやりくりしていることを僕は知っている。僕は今、自分の置かれた状況を冷静に受け入れ、限られた費用の中で夢を実現するために自分にできる精一杯の努力を続けていこうと思っている。

